松尾隆夫記念会報

松尾隆夫画（1946．2．10）

1992．2．16　山口県周東町

NO・40

1992・6・1

出版記念会で挨拶される松尾画伯夫人

目　次

河上肇の日記と壽岳先生……杉原四郎　1

１９９１年度総会記念講演……林　直道　5

河上肇詩注余話……一海知義　15

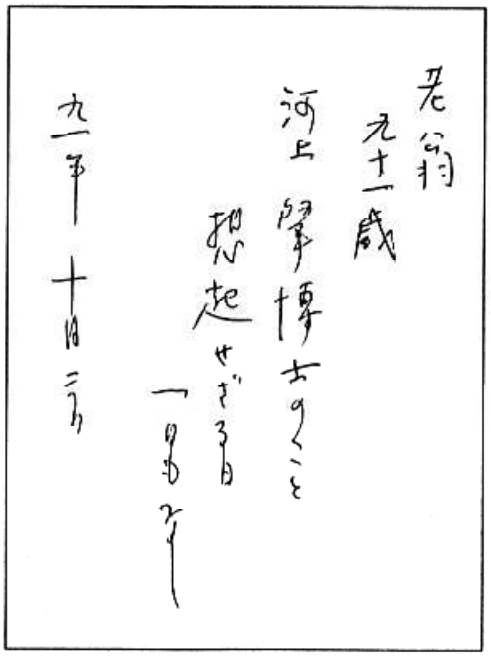
会員通信……21

正誤表……39

編集後記……40

入会のすすめ、会則

壽　岳　文　章 先生（1992年1月16日御逝去）



（九一年度総会案内のご返事より）

所感

～記念集会によせて～

第二の故郷を京都と思い定め、そこに住みついてから七十余年、河上肇の学風と人がらを慕って京都大学へやってきた若者たちのことを想ういうかべるにつけても、その学風を継いだ蜷川虎三その人の府政における業績さえ忘れられてゆくかに見える昨今の情況、無念残念にたえません。幸いにも、最善の努力を傾けて望み得られる最良の結果を見た河上肇全集の完成を契機に、一人でも多くの人が、その胸に、また行動に、河上肇像を彫り始めたら、京都の、日本の、いな世界全体の現在と将来にとってどんなにか明るかろうにと願わずにおれない老生の昨今であります。何とぞよろしく。

一九八六年五月十日

壽岳文章

（これは、河上肇没後四十周年、全集完結記念のつどいのレセプションで、作家の草川八重子氏によって代読されたメッセージを会報二十四号から再録したものである。）

河上肇の日記と寿岳先生

杉原四郎

寿岳文章先生の訃報に接した私は、ありし日の先生をしのぶべく、河上肇の晩年の日記を再読した。

河上肇は一九三五―一九三七年の「獄中日記」と、それにつづく一九三七―一九四五年の「晩年の日記」とを書きのこしている。これは全集の二二巻と二三巻とにおさめられているが、寿岳先生はこの二巻の編集を担当し、それぞれに解題を書いている（校注は一海知義氏担当）。「私はこの解題のために、日記通読中私を感動させた言葉やエピソードの、詳しいメモを造った」と先生は書いているが、その解題は、単に日記の解題につきるのではなく、日記には「思考し、批判し、行動し、反省し、熱中し、勉強し、時には娯楽する多感な河上のすべてが表現されている」ところの「自画像群の一大集録」であることをのべることで、誠に卓抜な河上論となっている。

「獄中日記」には寿岳先生は登場しない。先生がはじめて日記にあらわれるのは、一九三九（昭和一四）年七月六日、つまり出獄後約二年たった頃の日記、櫛田民蔵の未亡人が来訪した同じ日に「また計らずも京都市外向日村の寿岳文章氏来たる。同氏は以前亡児政男が英語の家庭教師をお頼みしたる人なり。政男との関聯にて時折思ひ出しだしゐたる人なれば、なつかしき気持にて会ふ」とあり、その後京都から東京の河上の所へ先生の著書（『書物』）や古唐紙や松茸や京の漬物などがたびたびおくられてくることが日記に見える。河上は一九四一年一二月二〇日に東京をひきあげて京都に転居するが、以来一九四五年一〇月九日まで、吉田の河上と向日村の先生との間に親密な交友関係がつづいたことが、日記の中にこまかく記録されている。

一九四二年一月一三日、先生は近著『和紙風土記』と菓子をもって河上を訪ねる。同年六月一六日、河上は向日町へ先生を訪ねる。河上は先生に獄中で読んだ佐藤春夫詩集を贈り、先生から「安政三年刊行の高青邱詩集八冊、詩藪一冊、及び手すきの和紙を貰ひて、辞去」した。

河上が差入れてもらって獄中でよんだ『一吟双涙抄』（野田書房、一九三五年）というこの詩集に「（前略）十数年ぶりにお宅へ伺ふと云ふのに、何もお目にかけるものがありませぬので、こんなものを筐底から取り出しました」と書き入れ、さらに「丁度昨夕作った楽府詞」を書きそえて先生に贈ったのである（全集別巻五五―五六ページ参照）。

河上は晩年漢詩の研究や実作に関心をもつようになっていたが、先生の斡旋でスミス『国富論』などの洋書類を関西学院の図書館にゆずることになり（その交渉の記事が一九四二年二月―三月の日記に見える）、その謝金で河上は多くの漢書を購入することができた。そのことが河上の漢詩への熱意を一そう強める。

先生は向日町で入手した新鮮な野菜類をしばしば河上にとどけた。とりわけ向日町の近くでとれる筍は美味なことで京都でも有名で、毎年その季節になると、かならず先生から河上家にとどけられたことが日記にしるされている。たとえば一九四二年四月八日には「寿岳君、筍を持参さる」とあり、同一六日には「寿岳君の恵まれし筍、極めて美味なりしかば、遂に一詩を作りて送る」として、つぎの漢詩がしるされている。

家貧身初健
偏愛野蔬春
嫩筍如黄犢
旨日抵八珍

当時の河上と先生との間にかわされた会話の主なテーマの一つが漢詩であったことは、「晩年の日記」の解説のつぎの一節からも知られる。

「東京から京都に移住後、私は陸放翁その他漢詩人の研究についての原稿を託されたので、話題は屢々日本人の漢詩理解や創作にかかわった」。

日記からたどることができる河上と先生とのこうした交友関係湯（敗戦後の日記には、一九四五年九月二四日に「寿岳君より葉書」、同一〇月九日に「寿岳君より封書」とある）は、晩年の河上の生活をつらぬき、それを支えていた重要な一本の支柱であった。

後記、私はこれまで寿岳先生について二度短文を書い

た。一つは沖積会で一九八九年に出た『寿岳文章と書物の世界』に寄せた「寿岳文章と河上肇」（杉原『読書流紋』、未来社、一九九〇年所収）であり、もう一つは、『週刊読書人』一九九二年二月三日号の「追悼寿岳文章」に寄せた「反戦平和の高潔な生涯」である。本稿と合わせてお読みいただければ幸せである。

（講師紹介）

林先生について一言ご紹介申し上げます。林先生につきましては今更ご紹介する要もないかと思いますが、河上肇とは非常に縁の深い大阪商科大学のご卒業で、戦後は大阪市立大学の経済研究所の教授として一貫して経済学、特に経済原論についてご研究をなさっておられました。今は大阪経済法科大学で引き続き経済学の教授をなさっておられます。先生は原論のご専門で、今から十二年前でしたか『フランス語版資本論の研究』で野呂栄太郎賞を獲得されました。『資本論』の研究、特に恐慌論の研究では非常に高い評価を受けている仕事をなさっておられます。また単に理論的な研究だけではなくて日本経済あるいは社会主義経済、そういった現実の経済分析にも非常に広い研究範囲の中で精力的な仕事を今でも続けておられる方であります。河上肇につきましては先生は学生時代から河上の書いた物を勉強しておられ、あるいは戦時中の大阪商大時代に河上について色々と思い出がおありのようで、今日はそれをめぐる非常に有意義な

杉原四郎

お話しを承るものと期待しております。また先生は一昨年、学習の友社から『嵐の中の青春』という本をお出しになりました。この本は山本宣治・河上肇・野呂栄太郎・片山潜、この四人の思想と生き方についておまとめになったものですが、この中でも先生は、自分は学生時代に河上の本を読んで非常に感銘を受けたと述べておられます。そういう、現代の日本経済学界の重鎮であり、今年五月に大阪で講演をいただきました置塩さんと並んで経済理論学会の代表的な研究者であります。林先生をお迎えしまして、これから皆様とご一緒にお話しを伺いたいと思います。どうぞご清聴お願い致します。（拍手）

〈一九九一年度総会記念講演〉

私の戦時下学生生活と河上　肇先生

林　直道

只今紹介いただいた林でございます。私は一九三九年（昭和十四年）に大阪商科大学という、ＪＲ阪和線の杉本町、大阪と和歌山の境にあった、今の大阪市立大学の前身に当る学校に入りました。私は直接に河上先生から教えを受けた事はありませんが、私の学校には藤田敬三、福井孝治、堀経夫、名和統一というような河上先生の直系の弟子に当るような教授がずらりっとおられ、その教えを受けたので、従って私は河上肇先生の孫弟子になると思っています。

治安維持法で投獄されていた河上先生は一九三七年に出獄された。獄中では判事から少しでもいいからマルクス主義に対する疑問をのべるといった内容のことを書きさえすれば早く出してやるといわれましたが、そうした誘惑を蹴って最後の満期まできちっとつとめて、昭和十二年に出られたわけです。その時の心境を「我もまた深山の奥の苔清水　あるかなきかのかそけきに生く」という歌に表わされています。自分はもはや現実の階級闘争から引退した廃兵である。今はただ社会の進歩の邪魔にならぬよう、山奥の苔清水のようにそっと余生を送りたい、と語って出獄されたわけです。当時は、もしも河上先生が獄中生活や自分の一身上のことについて書かれたならば飛ぶように原稿は売れたでしょう。だからマスコミが河上先生の所へ殺到しました。しかし先生は一切それを受け付けず、一言半句も書こうとはされなかった。「清貧」に甘んじると言う言葉がありますが、まさに清貧です。先生は巨額の印税収入の誘惑も蹴って恩給だけの細々とした生活を送られたのです。特に晩年は栄養失調で、自叙伝を読みますとお弟子さんやいろんな人達が

危険を犯してお見舞いに上がって、当時は甘い物がない、そのなけなしの甘い物を河上先生の所へ持って行く、ということがずっと出ています。それでも終わりの頃にはお弟子さん達も食料不足、甘い物不自由になりまして、持って行く物がありません。河上先生はいつもひもじい思いをし、寒さに震えておられた。福井先生に聞いたのですが、いつも鼻水を垂らし、痩せ衰えた、そう言っては失礼ですが野良犬のような恰好で、「これがあの偉い河上肇先生か」と思うような生活をなさっていたと言われます。そして法然院のたたずまいを殊のほか愛好され、「この地、願わくば屍を埋めん」という有名な「法然院十韻」の詩をお書きになっています。こうして、漢詩を作ったり、美しい京都の山紫水明の地にとけこみ、清らかな生活を送っておられました。

私、大学へ入りましたのが昭和十四年ですから、先生が獄から出られて二年後です。その頃は河上先生のかの字も知りません。当時はどんどんと戦争が拡大して行き、その中で思想圧迫がひどくなって行った時期です。ここに年表がありますが、先生が出獄された前後を抜粋しますと、昭和八年、滝川事件、十年、美濃部達吉天皇機関説問題、十一年、山田盛太郎・平野義太郎・小林良正など、いわゆる講座派の経済学者が多数逮捕されました。十二年、同志社事件で貝島兼三郎・田畑忍さん等が逮捕。さらに同じ年、東大の矢内原忠雄さんの「国家の理想論文」が咎められる。それから京都の久野収・真下信一・中井正一さんらの世界文化グループが弾圧を受ける。次いで十三年、大内兵衛・有沢広己・脇村義太郎、いわゆる労農派教授グループが逮捕。こういうふうに枚挙にいとまないほど社会主義思想を中心にあるいは自由思想が次から次へと弾圧を受けたわけです。十四年になりますと河合栄治郎さんの「学生叢書」が発売禁止になりました。河合先生は文部省の思想善導運動の委員に任命され、全国の大学でマルクス主義・共産主義批判の講演をして回られた先生です。その河合先生の著書『第二学生生活』も発売禁止になる。こういうふうにどんどん思想弾圧が広まった時代です。

私は大阪市内のサラリーマンの家に生まれまして社会のことは何も知らず、受験勉強だけした箱入り息子がぼそっと大阪商大の予科へ行ったんです。親戚に非常にいろんなことをよく知っている人がいまして、「大阪商大は京大事件で京大をやめた末川博・恆藤恭・佐々木惣一などの先生が行かれたので、すばらしい大学になった」

といってすすめてくれたのです。京大事件の中心であった優れた法学者が大阪商大へ集まられた訳です。それから学長の河田嗣郎さんがすぐれた人でした。大阪商大は前身が大阪高商と言いまして、大阪の財界人が有能な番頭を作るために作った学校です。ところが時代とともにどんどん拡大し、時期は少しあとのことですが野村証券が大きな利益をあげたとき、相当の金額を寄付された。大阪市は当時は東洋一の豊かな町で、その大阪市の作った学校は高商では足りない、大学にしようということで昭和三年に経済と法律の単科大学、大阪商科大学になりました。その初代学長に河田嗣郎先生を京大の経済学部から引き抜いたのです。この人は河上肇さんとは非常に親交のあった人で、河上先生が文部省の圧力で京都大学を辞めることになった時の教授会では欠席するという形で評決に加わらなかった、消極的ではありますが一種のレジスタンスを示された方です。

そんな河田さんが学長ですので色々革新的な事をやりまして、例えば講座制というものはとらない。講座制の弊害は自分が京大時代につぶさに見ている。学科目制という形にして、研究業績をあげた者はどんどん昇進させる、そのかわり研究しない者は辞めてもらうというシステムにしたわけです。この河田学長が河上先生の弟子に当たる学者をどんどん大阪商大へ集めた。そういう事ですから大変異色ある大学となり、当時では恐らく日本で一番自由な雰囲気の残っていた大学でなかろうかと思います。ここの京都民報という新聞があります。ここに茂山千之丞さんが書いておられます。私も知らなかったのですが、茂山さんも大阪商大の出なんですね。「私が京都から、親の選んだ質屋とか貿易商とか商売人になる道を捨てて大阪へ来たのは大阪商大の自由な校風、リベラルな雰囲気に憧れていたのです。当時大阪商大には滝川事件で京大を追われた先生が多数入っていました。軍事教練が学校の正課になる時代の中で、この雰囲気に対する抵抗が学校全体に感ぜられました。大学は期待通りでした。自分は京都から遙々和歌山と大阪の境まで通った」と書いておられます。

私たち旧制中学時代の同窓生が集まってそれぞれの高校・予科の噂をした時も、寮にいるとどんな本を読んでいるかを定期的に検査されるとか、非常に束縛が厳しいと言っているのに大阪商大は全く自由で皆にうらやましがられた。初めの頃は教室へ行くとマルクスの名前も出てくる。昭和十四年頃でそうなのです。これはひとつは

大阪という町が商業の町で、東京や京都のように大学に対する思想的・政治的監視があまりなかったんじゃないかと思うんです。ちょっと穴場のようになっていたんでしょう。学内は全く自由な雰囲気でした。例えば喫茶店へ学生が行きますと若手の先生なんかが来ていて、そこではマルクスの理論についてどんどん語られるんです。ほとんどの学生があの時代でも長髪でした。それに心斎橋なんかデモして練り歩いたり、しばしば警察からこの時局になんだと言われたりしましたが、私達は自由を満喫しました。河上肇全集の第二十三巻を見ますと、先生の出獄の見舞金・還暦の祝いのことが出ていて、大阪商大の教授達の殆ど全員が河上先生にカンパしていることがわかります。私達が味わった自由な雰囲気は河上先生に縁があり、そのゆかりの人々によって作られた自由である、私達はこう感じていた訳です。

ところがそれから時代が急テンポで右へ右へと動いて行きます。年代的にいいますと昭和十四年、ノモンハン事件、十五年、仏領インドシナ進駐。それから国内政治では日独伊三国同盟、大政翼賛会。労働組合も解散させられ、産業報告会、こんなものがでて来る。それに治安維持法がまた改悪され、予防拘禁制度がしかれた。これに対応して学内でも軍事教練が必修になった。兵役施行法が改悪され、第三乙種というのが出来た。これは兵役を免除される丙種をうんと少なくするため、従来丙種であった者を第三乙種に入れるんです。それに配属将校が全部の大学に配属される。大学・専門学校の修業年限が順次短縮され、最後にはまる一年間短縮、これが強行されました。こんな情勢になって来たのです。

勉強家として評判の高かったゼミナールの先輩が卒業して戦地に行っていたが、戦死した、こんなニュースが伝わって来て、死という問題が私達学生生活の中に身近に迫って来たのです。人間はいつかは死ぬ、人間は永久には生きることはできないんだ、これは覚悟しています。しかし戦争によってごくわずかの年限の間に戦争に行く、そして何％かの確率で必ず死なねばならない、言わば一定の確率での死刑宣告です。非常に深刻に悩みました。受験戦争で苦労してやっと上級学校へすすみ、得がたい自由な雰囲気を味わったのに、その行き着く所が戦死と言うのでは一体何の為の人生か、自分たちは何の為にこの世に生まれたのか、こんなことを友人たちと語り合いました。政府や上に立つ人が言うように天皇の為に命を捨てる、国をまもる為に柱となる、これが日本男子の生

き甲斐だ、なんてことも一応は口にしてみるのです。しかし何か空しい。それよりも我々はもっと生きた喜びを、恋人と歩いたり、友人とスポーツをしたり、山歩きをしたり、或いは文学作品をよみ、つくり、哲学を論じる、こんなことが楽しくて仕方ないのです。これが人間、人生の喜びではないのか。それを捨てねばならないとは何としても理解出来ない。なぜ戦争なんてものがあるのか、この疑問が解けません。

それを上級生や友人に聞く。すると何人かの人から「それを判ろうと思えばマルクスを読まんとあかん」と言われる。その当時、私はマルクスなんて全く知りませんでしたが、たまたま若死にした私の叔母の家の棚の中に河上肇の「第二貧乏物語」が入っていました。これを読んでみると今まで全く知らなかった、考えてもいなかった、そんな世界が開けて驚嘆したのです。話が説得的で、しかも全編、強烈な正義感が貫かれている。私は徹夜して一日で読み終えました。そして「これはええで、これを読め」と友人に言って回りました。しかしこのころは内務省による出版物発売禁止・大量検索が続き、本が手に入らない時代で、私の学生生活の八十%までは本探しにあけくれました。古本屋から苦労して集めた本は私達研究会のテキストにし、回覧し、どうしても手に入らないのは筆写です。コピーのない時代ですから重要な文献は片っぱしから書き写しました。

その当時、河上肇先生の思想的影響というのは非常に大きかった。私達のグループで強く影響を受けたのを何冊か挙げろというと、河上さんの「第二貧乏物語」・「経済学大綱」、それから野呂栄太郎の「日本資本主義発達史」・山田盛太郎の「日本資本主義分析」です。受験勉強をやったせいで記憶するのは得手なものですから、これらの本の重要な所は丸暗記しようとしたものです。そのうちのいくつかは今でも覚えているほどです。とにかくそれほど感激して、打ち込んで、こういう理論をマスターすることによって我々は現在の死の恐怖を、この無駄な殺しあいの戦争を、こういう矛盾をなくした社会を作る助けになるんだとか、こんな信念みたいなもので皆、必死に勉強したものです。

これが昭和十六・七・八年の頃です。こういう研究からさらに進んで、二つの実践運動がおこりました。一つは立野保男さんの留任運動です。この人は東の大河内一男か西の立野かと言われた時期もあったほどの大変優れた理論家です。マックスウェーバーの『社会科学方法論』

という、あの難しい本を大学卒業してすぐに翻訳されたほどです（岩波文庫）。その立野さんが飛ばされるというので、その留任・陳情運動が十六年から始まりました。丁度太平洋戦争が開始され、空襲警報が鳴り、戦争がいよいよ身近になった、卒業してからではなくて日本の国土の中にいても戦争が迫って来たという感じがしたのです。この立野留任運動は実を結びませんでしたが、相当数の学生が一生懸命に動きました。

その次に昭和十七年の四月、非常に大きな制度変更が大学から出されて来ました。それまでは、他の大学と同様に、自由聴講制度がとられていました。それを今後は出席制度に変える、座席が決められて座っている横を事務の人が通りながら出欠をマークしてゆくというのです。出席時間不足では試験を受けられず、単位が取れない。すると徴兵猶予が取り消される。だから厭なつまらん授業でも聴かねばならなくなる。これは大変だという訳で皆必死になったんです。これは大学の本質・ありかたから考えておかしい、自由に教授の講義を選択し、自由に聴講する、これが大学だと考えたからです。この運動は全学を巻き込んで大きく盛り上がりました。数回の交渉がおこなわれ、事実上のストライキもやりました。学年全体が教室に立て篭もって、入口の所には運動部の大きいのがおってピケを張る。すると「こんなストやって、これが憲兵に知れたら皆、銃殺やぞ」というデマも流れました。私達は首謀者は憲兵に引っ張られるかもわからんという恐怖感いっぱいでした。そこで学生部から学生代表の呼び出しがあると、委員が次々に交替することにしよう。全員が委員になろうというわけで、私たちはこれを上杉謙信車懸りの陣なんて言ってました。大学側では、今度の場合は運動が根強いと感じて、妥協案を言って来ました。学生集会所に毎日午前中だけ新しい名簿を貼り出しておくから自分でハンコを押しなさい。するとその日は全部の講義に出席したものとみなす、と言うのです。これですと友達にハンコを預けておいたらいいわけです。我々は名を捨てて実を取りました。こうして出席点検制度反対運動は決着しました。だから事実上何も実害はなく、学生は今までと同様に自由に講義をえらんで出席し、自由に勉強できました。　これが昭和十七年の四月ですが、一ヵ月がかりの運動がやっと実った直後五月二十一日に、河田学長が亡くなったのです。全学学生が河田学長の家の側にずらっと並びます。そこへどこからともなく「河上肇が来るぞ」という情報が伝わって

来ました。当時河上先生はお坊さんのような生活をされていたのですが、我々にとっては伝説上の人物です。その生きている河上さんが我々の目の前を歩いている姿を見たのは物凄い衝撃でした。泣いた奴もいました。本当の思想家と言うのはそういうものでしょう。河上先生は一言も発したわけではない。ただよぼよぼの爺さんが杖をついてスッと通った。その姿を見ただけで、感激して、涙を流し、我々は真理と自由のために命を捨てても惜しくないと多くの学生が決心したのです。感動の一瞬でした。「全学の学生が道路沿いに整列している前を長身痩躯、頬骨の突き出たよぼよぼの河上先生がスッと通って行かれた。ただそれだけのことである。学生の隊列は感動で声もなくどよめいた。その夜、サークルのメンバーはこの感激をバネにして社会科学の研究と帝国主義戦争反対に一層馬力をかけようと誓い合った」（『河上肇全集』折込月報　林稿）。私の青春時代の一番感動した日のひとつであります。

それ以降、戦況はガダルカナルからの日本軍撤退、スターリングラードでのドイツ軍の降伏、山本五十六元帥の戦死というように、激変が続きます。

この後、我々は精力的にいろんな活動をしました。主力は学内での研究所とかゼミナールでの研究ですが、ある者は卒業生と連絡を取り、工場の寄宿舎へ潜り込み、宣伝啓蒙するとか、初歩的ですが実践運動につとめた者もいます。昭和十八年に入りますと戦争色が強くなり、理工科系を除く全学生の徴兵猶予停止。十月二十一日、明治神宮外苑競技場での七万人の出陣学徒壮行会。十一月二十二日、仮卒業・仮終了。十二月一日、十九歳を越える学生が一斉に入隊。こういう状況の中で十八年三月、六月、十一月、三回に分けて大量の検挙が始まりました。いわゆる大阪商大事件です。この時、殆ど根こそぎやられました。我々は最大限注意して非合法活動が漏れないようにしたのですが、満鉄で事件があり、その関係で名和統一先生のグループがやられ、次に内田穣吉さんの貿易研究所のグループがやられ、そういう所から特高警察は大阪商大に学生の大きな反戦組織があるということを掴んだようです。

次々とやられて行きました。検挙された学生のうち四十四人は本の没収と訓戒処分に止どめ、すぐに戦地に送られました。それ以外に三十四人の学生が起訴されました。さらに卒業生及び教員が十二名、合計四十六人が起訴されました。途中で戦争が終わりましたが、終戦以前

に裁判が終わり実刑を受けた者三人、獄中で死んだ人三人、それから精神異常におちいった人が三人、更に出獄後死んだ人が数人います。これが犠牲者のアウトラインです。

私も二年間、拘置所にいたのですが、そこでは実にいろんな事がありました。気の滅入っている友人を励ますこと、獄中で発狂された立野さんを早く釈放させること、につとめました。坂井豊一さんと内田穣吉さんが獄中闘争のリーダーで、そこから指令が出されたようです。教室で共産主義の宣伝をしたという立野先生にたいする検察の告発が無実であることを各人の裁判のなかで立証しようとしました。私は拘置所の四舎に収容されていましたが、そこには坂井さんと内田さんがおり、二人の指令がすべて私の所に来るのです。今考えてみて相当頑張ったと思います。まず、連絡のために必要な鉛筆を手に入れようと努力しました。これについては色々面白い話があるんですが、もっと世の中が変わってから言うことにします。苦労して鉛筆の芯を手に入れ、爪楊枝七本を使い、衣類からぬきだした糸で固くしばって鉛筆を作るのです、簡単に出来ます。看守に見つかりそうになるとくだいて鉛筆とレポ紙を飲み込むのです。私なんか何度も飲み込みました。

今から思えば色々面白い話もあったのですが二年間苦しみと悲しみと、それから血沸き肉踊るような獄内生活をやりまして、やっと終戦になりました。終戦の少し前には看守達が動揺して、自分はどうなるのか、米軍に銃殺されるのと違うやろかと心配するのです。米軍の沖縄上陸、あの頃から獄中の力関係が変わって来ました。思想犯というのは赤い字で着物に番号が書いてあり、下が0です。大阪商大からあんまりどかっと思想犯を入れたもんですから、さながら商大のアパートです。編笠を破っていてもすぐ分かるんです。敗戦、釈放の日は近いぞと激励し合いました。

やっと戦争が終わりました。十月十九日に自由戦士出獄人民大会が中之島で開かれました。その度上、日本の社会科学の父と言うべき河上肇先生が今瀕死の床にある、カンパしようという訴えがありました。なけなしの財布をはたいて、当時のお金で何万円でしたか集まりました。黒木さんという人が大会を代表して河上先生のお宅にカンパをもって行かれました。しかし河上先生はどうしても受け取らない、どうしてもと言うのなら一旦有り難くお受けして、そのまま全額を解放運動に寄付するという

ことになったようです。

河上先生の場合は最後まで金銭の問題についてはきれいな方でありました。それから戦時中河上先生がひそかに書き綴ってこられた自叙伝が出版されることになり、私達のグループの山本廣治君が原稿の清書に通いました。今は中堅企業の社長をしている山本に何十年ぶりかで逢いました。社長族ですから、もう考えもかなり変わっているのではないかと思っていましたが、かれはあの時の思い出を大切に胸に秘し、「河上邸に通って自叙伝を清書した日のことは自分の生涯のなかで忘れえぬことであり、非常な名誉だと心得ている」と言っていました。

以上、私の戦時の経験と河上先生とのかかわりにしぼってお話させていただきました。先程杉原先生のお話に出ましたフランス語版の『資本論』について一言しますと、福井先生が河上先生から手垢にまみれたカウツキー版の資本論を貰っておられました。カウツキー版にはフランス語版からの引用がたくさん入っているのです。福井先生は河上さんから『資本論』をマスターするにはフランス語版を徹底的に読む必要があると言われたそうです。日本でもフランス語版を一番研究されているのは河上先生のグループであったと思います。そこで、私もいつかはやりたいと思っていましたが、十二年前に『フランス語版資本論の研究』という本を書くことができまして（大月書店、一九七五年）、河上・福井両先生にたいする学恩の万分の一をお返しできたような気持ちでおります。　それから先程話にありました『嵐の中の青春』（学習の友社、一九九〇年）は私の尊敬する河上肇、山本宣治、野呂栄太郎、片山潜、この四人の優れた思想家の生涯と思想を書いたものです。ソ連・東欧の激動という情勢の中ですが、戦前日本の科学的社会主義の先覚者たちが、どのように純粋に、清く生きぬいたかを多くの人に改めてふりかえって頂きたいと切望しています。

私は今日、すべて一人称単数の形で言いましたが、実は全部「我々」と言った方が適切です。約十人ほどの同世代のメンバーがおり、今も社会科学・経済学の研究をやっております。だから私の今日の話は私と同世代の友人達との共通の体験という気持ちで申し上げたのです。以上でございます。（拍手）

（これは一九九一年十月二十日、京都法然院での一九

九一年度河上肇記念会総会でのお話を事務局がその要旨をまとめたもので文章はすべて事務局にあります。）

河上肇詩注余話（三）

一海知義

莫嗤冬夜永
孤客夢風雲

この詩について、『詩注』では、「読み下し文がそえられていない」と書いた。しかし私が『詩注』を書いた当時、見ることができた日記は、抄本（省略本）『河上肇晩年の生活記録』上・下（一九五八年第一書林）であり、のちに全集編纂に当ってはじめて見た日記原本には、次のような読み下し文がそえられていた。

老い去って無事を希ひ、
貧なりと雖も文を売らず。
名を避けて懶慢を貪り、
剣を売りて離群を択ぶ。

三、「青楓画伯に寄す」その他（昭和十三年その二）

昭和十三年（一九三八年）一月二十日の日記に、

次の一詩を青楓画伯に寄す。

として、五言律詩一首がしるしてある。

老去希無事
雖貧不売文
避名貪懶慢
売剣択離群
白眼忘機我
丹青楽芸君

白眼、機を忘るゝの我、
丹青、芸を楽むの君。
嗤ふ莫れ冬夜永く、
孤客の風雲を夢むことあるを。

この詩、同日付の津田青楓あてハガキにも、

今歳六十始学レ詩　試賦ニシテ贈楓画伯

と題して書きしるし、「之は次のやうに読ますつもりです」として、前掲とほぼ同様の読み下し文をそえる。

ところで日記の詩とハガキの詩の間には、二か所文字の異同がある。すなわち第二句「不売文」をハガキでは「不沽文」とし、第四句「択離群」をハガキでは「甘離群」とする。

「文を売らず」と「文を沽らず」は、意味の上でさして変りはない。ふつうは「売文」というが、第四句に「売剣」ともう一度「売」の字が出てくるので、同じ文字を二度使うことを忌む律詩（近体詩）の約束を守るため、「売文」を「沽文」と改めたのかも知れない。「売」は仄声、「沽」はふつう平声だが、仄の音もあるので、両字のさしかえは許される。

次に、「離群を択ぶ」と「離群に甘んず」では、「択ぶ」が積極性、「甘んず」は消極性を示し、句意がかなりちがってくる。「離群」は『詩注』でもふれたように、中国の古典『礼記』檀弓篇上に見える「離群索居」という語にもとづき、仲間から離れてひとりわびしく暮らすことをいう。そういう状況を、みずから「択ぶ」のか、それに「甘んずる」のか。

ただ平仄の関係からいえば、「択」は仄、「甘」は平で、「甘離群」とすると平平平といわゆる「下三連」の禁を犯すことになり、やはり「択離群」でなければならない。

この詩、五言律詩を試みての第二作だが、脚韻、平仄、対句など、規格を守って作られており、破綻はない。しかし河上さん自身あまり気に入らなかったのか、自選詩集である「閑戸閉詠第一集」に収めない。

なお、末句（第八句）の「風雲」について、『詩注』では、「ここは風雲之志の意ではなく、風雲月露、すなわち花鳥風月を詠ずることをいうのであろうか」と書いたが、やはり風雲之志の風雲ととった方がよいようである。「嗤うなかれ」といいながら、実は自嘲の気味をこめた措辞なのであろう。

右の詩の翌日（一月二十一日）に作られた五言絶句「冬夜偶成」は、日記にも見え、「閑戸閉詠第一集」にも収められている。

硯池氷欲雪　硯池氷りて雪ならんとするも、
茵蓐暖於春　茵蓐春よりも暖かなり。
憶去年今夜　憶ふ去年の今夜、
幽窓抱膝身　幽窓膝を抱きし身。

『詩注』でもふれておいたが、第三句の、

憶　去年　今夜

1・2・2というリズムは、五言のリズムとして破格である。第一句のように、2・1・2、あるいは第二、第四句のように、2・2・1、のいずれかでなければならない。そのことは、さきの一首「青楓画伯に寄す」に照らしても、明らかである。

この詩、『詩注』につけ足すべきことはないが、第一句の「氷欲雪」が漢語（中国古典語）の表現として成り立ちうるかどうか、すこし気になる。

なお、宋代の詩人陸放翁の「夜意」と題する冬の作（五律三首の第二首、『剣南詩稿』巻九）に、

灯昏如隔露　灯昏くして露を隔つるが如く
硯冷欲生氷　硯冷えて氷を生ぜんと欲す

という句がある。河上さんの句は、発想を放翁の句に借りたかに見える。しかしそうではないだろう。河上さんの文章に、はじめて放翁の名が現れるのは、この年の暮、十二月二十六日の日記であり、本格的に放翁の詩を読みはじめるのは、翌十四年（一九三九年）の二月からである（小論「矛盾と実事――河上肇と陸放翁」参照、一九八二年岩波書店刊『河上肇そして中国』所収）。

右の詩を作った翌日、一月二十二日の日記には、七言絶句一首と五言絶句一首をしるす。

まず、七言絶句。詩作をはじめてから最初の七絶である。

偸生拱手対時難
徒弄詩書趁昿年
可憫刑余垂老叟
憶之深夜不能眠

『詩注』では、「読み下し文はそえられていない」、と書いたが、これも日記原本には次の読み下し文が見える。

生を偸み手を拱きて時難に対し、
徒に詩書を弄し昿年を趁ふ。
憫む可し刑余垂老の叟、
之を憶へば深夜眠る能はず。

第二句の「詩書」ということばについて、『詩注』でも、「ふつう（中国では）『詩経』と『書経』（儒家の古典）をさすが、ここは詩の本」、と書いたように、中国古典語としては、「詩の本」という意味はない。あくまでも経書としての詩経・書経であり、したがってそれを「弄し（もてあそび）」という表現は、中国人には奇異に見えるだろう。河上さんの漢詩にも、ときどきこうした和習（日本的ことばづかい）が見られる。

次に第四句の「憶之」について。この第四句全体「之を憶へば深夜眠る能はず」は、『詩注』でもふれたように、陶淵明の「雑詩」第三首の「此れを念いて悲悽を懐き、暁を終うるまで静かなる能わず」をふまえいるように思われる。陶詩は河上さん獄中の熱心な読書対象だったのである。

ところで河上さんは、陶詩の「念此」を「憶之」と改めている。「此」（仄声）を「之」（平声）としたのは、平仄をととのえるためだろうが、「之」は散文的な助字であり、詩中（とりわけ近体詩）に用いるのはあまり好ましくない。

また、これは平仄の法則とは無関係なはずの「念」（仄声）を「憶」（仄声）と改めているのも、適切でないように思われる。なぜなら「念」が「思いを集中する・思いつめる」という意味であるのに対し、「憶」は「記憶する・思い起こす」という意味だからである。

これらの難点はあるが、河上さんの詩は、自らの思想・心情を真率に表出した「実事の詩」であるところがよい。しかしこの七言絶句第一作も、河上さん自身はあまり気に入らなかったのか、「閉戸閑人第一集」に収めていない。

次に、同日（一月二十二日）の五言絶句。「莫歎――歎く莫かれ」と題する一首である。

免殞身鋒鏑　身を鋒鏑に殞すを免れ
偸生寂避名　生を偸み寂として名を避く
莫傷時事否　傷むことなかれ時事の否なるを
応水到渠成　水到りて渠成るあるべし

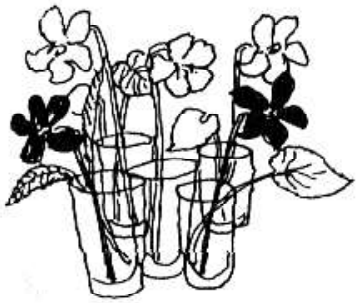
第一句の「鋒鏑」について。『詩注』では、「戦争。鋒はほこさき、鏑はやじり、すなわち刀と矢。転じて戦争の意。前年におこった日中戦争をさす」、と書いた。しかし『詩注』出版後に見ることができた一月二十七日付津田青楓あて書簡では、この語に自注を施して、「身を鋒鏑に殞すは、刑死の意」、という。

また同書簡では、第三句の「莫傷――傷むことなかれ」を「休歎――歎ずるを休めよ」と改める。

さらに、第四句「応水到渠成――水到りて渠成るあるべし」について、『詩注』では、「漢語の語法からいえば、水到渠応成、とでもすべきである」、と書いたが、同書簡では「有水到渠成――水到りて渠成ることあり」と改めている。そしてこの句に注して、「水到りて渠成るは自然に物の成功する意味の熟語」、という。

『詩注』でも、「水到渠成は、水が流れて来れば自然に溝ができあがる。平和の到来を予見していう」、と書いたが、河上さんのつもりでは、必ずしも戦争の終結のみに限定していっているのではないらしい。

なお「水到渠成」という成語は、『禅林語句抄』などにも採られている。出典は示さぬが、中国宋代の文人や哲学者の文章にはよく見える成語である。



剤としても格好の読物としておすすめします。―以下略―

（発売所　星雲社。　千五百円）

◇　◇　◇

図書紹介

武田　昌輔著「人物・税の歴史」

成蹊大学名誉教授の武田先生が、税制の移り変りをその時代の有名人にかかわらせてお書きになったエッセイ集です。

佐倉惣五郎にはじまり、河上肇の「小国寡民」と湾岸戦争九〇億ドル支援についての随筆でおわる二十三章の肩のこらない税制史です。日税連の片岡輝昭会長の序文を引用して紹介に代えさせていただきます。

「日本の税金は、現在、国税、地方税を合わせて五十種類をこえています。税の種類とその成立の背景は、社会構造によって決定されるといわれていますが、どのような社会事象や、事件をきっかけに誕生したか案外知られていないのも事実です。

そこで本書は、江戸時代からの新税誕生または廃止の背景がどんなところにあったのか、物語風にとりあげ、税金についての知識や見方を提供しようとするもので、税理士をはじめ納税者の皆様の日頃の合間の一服の清涼

神戸　治夫著「公害患者とともに二十三年　ふりかえりみれば　山川を」

研究会員の神戸様より次のようなお手紙とともに御本を賜りました。

「表題からもお分りの通り、河上博士のつくられた有名なうたの一部を拝借させて頂きました。博士の越えてきた山川からみれば、極めて低い山、小さい川であることは云うまでもありませんが、博士に対する想いを込めて書いたつもりです。

本を、最近の若い者の一人がまとめたものとしてご覧頂ければ幸いです。尚今月五日に京都で環境問題についての国際シンポジゥムがあった折り、法然院には参らせていただきました。

また、お願いですが、どなたか博士の書かれた論文の

中で、公害・環境問題について論述している部分がありましたら、お教え頂ければ幸です。――以下略――

'91・10・8　神戸　治夫」

著者の住所　川崎市川崎区中島二―十九―十一

電　話　〇四四―二二二―五九八一

会員通信

前の三九号には会員通信を掲載しませんでしたので、昨年十月以後のお便りがたまっています。着信順に載せたいと存じますので、今後共、ご意見、近況ご報告等をお寄せ下さいますようお願い申し上げます。敬称略。

（事務局）

前略

貴事務局の財政の厳しい事情拝察申上げ心配致しております。

末川先生ご存命中からの事情大門先生からもお聴き致しております。どうか記念会が今後も良心（河上博士の）の一灯として長く続く様に祈念しつつ、わずかばかりの金員を送り申し上げます。会の維持のためにご使用されれば幸甚に存じます。

（京都市左京区　森田　茂）

多額の御寄付を賜り有難うございました。

（事務局）

八月五日、再び入院中です。十二日（十月）には退院の見込み。リウマチのほか、ヘルペスにおかされ、左腕がマヒしましたがリハビリでようやく肩の高さまで上がるようになりました。

会報三八号病床でゆっくりよませてもらいました。充実した内容で又次号もたのしみにしています。

（京都市北区　梅田　晶三）

私事にまぎれ、会費納入忘れておりました。ただ「会」の性格について、いつまでも同じ型を守る必要もなかろうと思います。

新しい会員の仕事や声を聞きたく思います。杉原、一海先生の論文はそれなりに読ませますが、何か新しい風も欲しいですね。

（滋賀県今津町　前川　文夫）

父文一は、本年五月から病気療養中のところ、去る九月五日終に心不全にて不帰の人と相なりました。遅くなりましたが、この欄にてお届けさせていただきます。

（徳島市　三村　守）

いつも会報お送りいただいて、ありがとうございます。新日本出版社刊の新著「河上肇」大へん楽しく読ませていただきました。経済学部の学生時代に「自叙伝」をよんで夜をすごした青年時代の自分も思い出されて、よい一時でした。次号の置塩先生の講演をたのしみにしております。

（山口市　加藤　碩）

多忙にあけくれ思うにまかせません。ソ連社会主義の崩壊というショックもありますが関係の皆様方の奮闘を期待します。

（水戸市　河原井　忠男）

「会報」バックナンバーありがとうございました。三八号とともに早速県立図書館にお届けしておきます。この資料は山口における河上肇のこれから運命にとって機縁をなす予感がしてなりません。「会報」三八号で大阪での記念集会の盛会、豊かな内容をうかがうことができて、欣びをともにさせていただいております。

おふたりの御講演を掲載される次号を文字通り鶴首しています。

（山口県山陽町　細迫　朝夫）

台風十九号は、山口県では大変な荒れようでした。岩国市でも、これまでに経験したことのないもので、私の住んでいる家から一軒ぐらいのところで二階の天井から上が吹きとんだ家がありました。

さいわいなことに、河上肇の生家は百年以上たった古い家ですが、瓦が少し吹きとんだ程度でたすかりました。

毎回欠席で申し訳ありません。

皆様のご健康を祈ります。

（山口県岩国市　河上　荘吾）

各地に甚大な被害を残した十九号台風一過、当時がうその様な快晴の秋日和に恵まれております。総会のご通知と会報三八号拝受させて頂きました。

今号特に内容が豊富で心して読ませて頂きました。山口河上会も間もなく秋の研究会の集いの知らせがある事と首を長くして待ちのぞんで居りますところです。

法然院での総会にはぜひ一度と、いつも心にかけておるのですが、小生ごとき若輩ものがと・・・・断念に打ちすぎております。三度、河上さんの墓にもうでましたが、そこでは小生いつも「人間らしく生きる事」をお誓いして帰山しております。

乱筆にて総会の盛会を祈念しつつ。

（山口県防府市　上田　隆）

十月二十日の「河上肇記念会」には、ぜひ参加致します。昨今、塩田庄兵衛著「河上肇」を読み、彼の終戦時の心境や獄中での気持を久しぶりに読み、涙の出る思いを致しました。

（高槻市　上野　達也）

貴会益々御発展の由、お慶び申し上げます。

さて、私は今回大学時代の友人で貴会事務局のお世話をされている紀平さんのご紹介で入会させていただくと共に、総会に初めて出席させていただくことになりました。

河上先生のお名前は大学時代から勿論存じておりましたが、先生のご本は「貧乏物語」しか読んだことがなかったのですが、会報の最近号にも紹介されている月刊「現代」の特集記事がきっかけで先生の「自叙伝」を目下読んでいるところです。先生の激しい純粋な行き方に感動しております。これを機会に先生のお書きになったものを少しづつでも読んで行きたいと思っております。どうかよろしくお願い致します。

（大阪市北区　清水　武之助）

何時も御連絡を頂きまして有難うございます。久しくお墓参りも出来ませんでしたので楽しみに思い、出席させて頂きます。かしこ

（芦屋市　志賀　節子）

私に河上肇記念会を教えて下さった人は、森実良親（よしちか）氏（旧松山高文甲 → 京大経済学部卒）でした。その森実氏も三年前に亡くなり、河上会について話し合う同郷の人が亡くなり淋しい限りです。

河上会の会員名簿を作成して有料にして販売なさった

ら如何でしょうか。そして一年に一度、四国会、中国会、九州会という風に地区会を開いたらどんなものでしょうか。時代の風雲をくぐり抜けて、河上会は大切に継続されたければと念じております。会員すべてが河上精神をしっかりと身につける努力をしたいと念じております。

（高松市　千田　晴之）

毎度お世話さまで有難く御礼申し上げます。当日を楽しみにしています。激変の今日こそ記念会は一層意義あるものと存じます。

（吹田市　長谷川　俊雄）

拝啓　時下、益々御清祥の段と拝察申上げお慶び申上げます。小生、安井の娘むこの森田で御座居ます。今年はできれば出席致したく存じております。大門先生は元気でいらっしゃいますか。是非出席させて頂きお会いできる事を楽しみに致しております。

（京都市左京区　森田　茂）

法然院には初めて参加いたします。世の中には河上イズムに同調される方々が大勢おられることを心強く思いました。

晩年に漸くこのような会合に参加できて嬉しく存じます。

（京都市北区　三浦　源一）

今、年金者組合（全国で約二万人）の公的年金改革をめざす一千万人署名運動にとりくんでいます。会の今後の一層の発展を祈念します。

（宇治市　佐藤　武義）

塩田庄兵衛著「河上肇」を無中になって読んでおります。

河上先生を一層尊敬、好きになったと云うのが正直な感じです。先生を〝求道の士〟と尊敬していたのですが、塩田先生の書で、自分の直感があたっていたのが嬉しい状態です。

（貝塚市　西川　治郎）

例会の御通知落手いたしました。事務局御一同の何かとのご配慮拝謝致します。

扨て老生は郵政局関係での或る仕事について委嘱を受

けており、二十日に新潟の会合の先約があるので残念乍ら今回は欠席致しますが、些少の金員御同送申上げましたから、何かの費用の一端に御利用下さればと存じる次第です。

（河内長野市　藤木　福太郎）

多額のご送金をいただきまして有難うございました。財政建全化のために役立たせていただきます。

（事務局）

いつもいつもこの日は国語学会と重なり欠席となるのが残念です。はるか金沢から御盛会を偲びます。父の手伝いを何かとするなかで、私もしみじみ河上博士のことを想います。　一時河上マルキシズムは正統派にあらずと云われたこともある由ですが、ソ連の状況などをみるとき、そのプラスアルファの部分こそ大切なのではないかと、あらためて思っています。

（向日市　寿岳　章子）

前略　会報№38お受けいたしました。世話役の皆さんの御盡力を感謝しています。十月二十日（日）の総会には是非出席したいのですが健康上の理由から残念ながらできません。老化現象の上に先年行った腸の手術の後遺症があまりよくなく、日々少々当惑させられているような状況です。しかし、それだけにせめて気持だけは元気にもってやっていこうと思いながらやっているような次第です。皆さんのご健康をお祈り申し上げます

十月五日　　早々

（京都市左京区　岡部　利良）

岡部先生は十一月二十七日に死去されました。八十六才でした。

（事務局）

秋の法然院で催される総会は、毎年楽しみにして参加してきましたが、残念ながら今年はどうしても出席できません。予定されている林直道先生のお話しは是非聞きたかったのですが、やむをえません。

塩田庄兵衛先生の「河上肇」を拝読しました。本書によりあらためて河上肇が歩んだ道をふりかえってみることができました。特に若い人達に読んで欲しい一冊です。ある新聞の投書欄に本書の感想を印しました。

（大阪市港区　山田　一美）

前略　当日レッドパージ四十周年の集会を主催していますので出席できません。御盛会をお祈りします。

塩田庄兵衛先生の「河上肇」を読んでいます。大先輩の河上博士に対する先生の暖かい熱情に深く打たれています。河上博士の入門の書物としては最大級のものと確信します。　老いの眼から知らず知らずのうちに涙がとまりません。　熱いあつい拍手を

（北九州市八幡西区　山上　繁喜）

今回もまた総会に欠席することをお許し下さい。十月二十日がよいお日和でありますよう願っています。

最近、塩田庄兵衛著「河上肇」を読み、深い感動をうけました。あらためて河上先生の美しい偉大なご生涯を偲び（今日のソ連の情勢などとも想いくらべて）感慨一入（シオ）でした。塩田先生の本に触発されて、「留守日記」をまたとり出して読んでいます。何時読んでもそのたびに胸があつくなり、読んでいる私自身の心が洗われていくような気がいたしております。

総会の御盛会を心からお祝い申し上げます。

（熊本市　井上　栄次）

拝復　いつも内容豊かで読みごたえのある会報、うれしく読ませていただいています。世話人の方々をはじめ事務局のご努力に心から敬意を表します。

いつか必ず総会にも参加致したいものと存じますが、今年も十月二十日は神戸市内の小中高の教員組合の合同教育研究集会（全日本教職員組合傘下の）を主催しています。そのため出席できません。

兵庫の教育は、県立高校長の不正出張旅費支出事件、高塚高校女生徒校門圧死事件、県立農高入試改ざん事件、県教委高校教育課の一括窓口入試結果事前ろうえい事件と腐敗の極です。教育に直接携わる者、父母県民から直接信託を受けた私たちの使命は重大です。教職員と父母県民の力を結集、民主化と是正に全力をあげます。

（明石市　若林　正昭）

拝復　記念会報有難く受納いたしました。思いがけなく郵政会館での写真を同封していただき嬉しく拝受いたしました。

臨席の美人留学生のもとに人だかりができていて、あの日のパーティの雰囲気を蘇らせてくれます。王紅さんの朗読した博士の漢詩の余白に彼女の当日の感想を書い

てもらいましたので、一海教授の博士の漢詩集へのサイン、池上教授の論叢の抜刷とともに当日のよい記念が残りました。御礼申し上げます。

十月二十日はたしか博士の生誕の日、出席しお世話になりますのでよろしくお願い申し上げます　　敬具

（京都市伏見区　飯沼　辰雄）

心待ちしておりました会報三八号本日（十月三日）落手しました。十年前に家内を亡くして、家に一人でいるのが多いので郵便がくるのは私にとって嬉しい「出来事」です。特に会報の到着は〃

講師の林直道という御名前は九州、箱崎の学生の頃（戦後）本屋で知った懐しい御名前です。今年になって先日、名市大の近くの古本屋で林先生の若き日の作品を偶然発見し購入しました。處女作（？）書名は「西田哲学批判」（昭二三年発行）略歴から判断すると二三才の作品です。今年は八月二十二日、元名大の竹内良知先生が亡くなられました。

（京大哲学出身で名著「西田幾多郎」を書かれた）本棚から「マルクスの哲学と宗教」、「西田幾多郎と現代」を故人を偲んで読了しました。今年は又、高橋和己没後二十年。高橋の精神は今も生きていますネ。御礼まで。

（小牧市　岩本　桂）

拝啓　やっと毎週末の台風が過ぎ、一寸陽顔がしています。厳島神社は見るも無残、青森の万朶の林檎は全て落ち敷き、富士の西湖は全周八米の水漬り、普賢岳の地動末だ収まらず、天変地異が世情の誤りを戒めて久しいのに、日本の為政者は気付こうともしません。先日の無葉会で、和田洋一、黒田了一両先生の健姿を幾久方ぶりに見ました。ご案内の中にスナップ存り。小島大兄に厚礼。

（京都市左京区　幡新　呑庵）

日程の関係で会議に出席出来ませんが、私は昭和二十一年に大学を卒業のとき、河上肇先生についてをまとめました。十二万字の論文をまとめましたが、当時はまだ資料のないときでしたが、どうやらまとめることが出来ました。この間に多くの河上先生の関係の先生からも御教示をいただきました。

私は四十七年に衆議院議員に初当選以来、連続七回当

選し現在社会党に所属しておりますが、河上先生を心から尊敬し、その生涯に深い感激をもっております。

これからも引ついで先生の御教示を存留して行きたいと存じます。御盛会を祈念し、皆様の御健康を御祈りいたします。

（土浦市　竹内　猛）

此の年河上先生の憶う歌　三首

たどりつき　ふりかえりみれば
　われらかく　かわかみ大人が
　　ひざもとに居て

なおかつも　かわかみ大人は　会わざりし
　現代の此の　激動に居て

新世紀も　迎えむ時し　まさにその
　かわかみはじめの　本質をこえおもえ

十月二十日が本卦の誕生日なる松丘子

（京都市左京区　松岡　正美）

会報三八号ありがたく受取り喜んで拝読させて頂きました。東欧の社会主義の国々が次ぎ次ぎ崩潰の本当の原因は何かと自問しているところです。

毎年楽しみにしている総会は喜んで出席させて頂きます。林先生の「私の戦時下学生々活と河上肇先生」の御講演が予定されているとの事、一層興味を覚えます。何卒宜敷くお願い申し上げます。

五月四日の大阪中島まつりで大内兵衛先生の「高い山の人物アルバム」を求めました。マルクス学が興味深いものです。

（堺市　小田　正大）

ソビエト始め世界の状勢は変動をゆるめないが、河上先生の偉業は燦としてかがやき、生きてゆく我々に勇気を与えて頂く思いです。

（京都市左京区　小泉　参次）

今年も河上先生の墓前でお参りをし、会員皆様のご健康のお姿を拝見できるのを心から嬉しく思っております。

惨憺としか思えないソ連の実状を知るにつけ偉大な先駆者のヒューマンスティックの基盤と理想を見失って、イデオロギーさえ放棄する権力層の怠慢の下で苦しんだあの愛すべきソ連民衆に同情を禁じ得ません。

その一方でこの権力層のイデオロギーの裏返しとしか

思えない利己打算イデオロギーで理屈をこね、退廃の世相にも媚びる発言で民主主義を衒う学者、評論家を自認する人達の饒舌には食傷致しました。

併し、良心に徹する方々が肅々としてゆるぎなくイデオロギーの研鑽に努められている姿には心強く有難く感じております。

豊潤なな感性で人間の文化をこよなく愛し、その上で善悪、正否を厳しく追求せられた高い倫理性、自らの良心に徹せられた河上先生の御人柄と足跡が、もっともっと多くの人々に理解され、継承される事を願って止みません。

（神戸市北区　葉抱　武三郎）

経済の破綻がソ連を瓦解させた。社会主義体制が危機に瀕している。もし、河上さんが生きていたら、どう見たろうか？ソ連共産党の解体をモロ手を上げて歓迎しただろうか？もっと別の表現でいいあらわしたのではないだろうか？七十年の歴史の中でいろいろのいきさつ、過ちがあったようだが「解体」は憂慮すべき事態ではないだろうか？総会をぜひ成功されますよう祈念いたします。

（仙台市太白区　高橋　康則）

何時も御案内その他お世話に預り有難う存じます。当日先約の己むなき会有り、欠席させて頂きます。悪しからず御寛恕願い上げます。

ソ連邦自体の解体、再編にまで至る大変乱の中、マルクス主義の敗北が声高に言われていますが、表面の時流に惑わされず、今こそ真に人間を愛したマルクスのハートと常に自己の「現在」に安住せず、先へ先へと「山川を越えては越えて」研究、模索を進められた河上先生の情熱に学び、社会、経済の在るべき姿を自分なりに見きわめるべく努力を続けて行きたいと念じております。

（六十代半ばの一歌人）

（茨木市　大西　公哉）

いつもお世話様です。ありがとうございます。マルクスや河上さんのおかげで、ものごとがよく見えるようになり、学問をはじめた童子のように、おもしろいことが多い毎日です。東欧やソ連の激動、日々生起する世界の数かずの事件、過ぎてみると、理論通りに進んでいるなあ、「眞実（理）は必らず勝つ」の思いを強くします。

昨年欠席しましたので今年こそはと楽しみにしていましたが、同日に行ないます老人クラブ旅行の世話役をつ

とめるハメになり会に出席できません。会費等滞っているのではと思います。お知らせ下さい。ご盛会を祈ります。

（兵庫県城崎町　古池　信一）

学生時代『第二貧乏物語』が出版されたとき、直ちに私は、それを精読したのであったが、スターリン主義に忠実ではあるが、殆ど何んの感銘も受けなかったことを記憶している。それに比べて『貧乏物語』や『自叙伝』のようにマルクス理論を抜きにしても河上先生の文章が、なお生彩を放つのは、その溢れるようなヒューマニズムに打たれるからではないかと思う。

河上先生が、ますます発展する共産社会として、ソ連に対して、あらゆる賛辞を惜しまなかったに拘らず、七十四年の成果が、あのように惨憺たる結果であったことを思うならば、その理論構造が、いかに精緻であらうとも、理論が謬っているのであって、事実が謬っているのではない。

事実の検証に堪え得ないような理論は空理空論に過ぎない。『高福祉』には『高負担』『高負担』には『高賃金』が不可避であり、あまり剰余価値に対する「労働の分配分」を多くして、資本の分配分を少くすると「革新投資」が不能になって「生産性」が低下して『高賃金』も不能になる。今スエーデンが、その状態に陥っている。根本的には『帰属説』だけで『資本の価値生産性』を考えない『労働価値説』の謬りではなかろうか？

盲信せず「批判的摂取」こそが肝要なのである。

（東京都国分寺市　陽明義塾　佐藤　克己）

今、なぜ、河上肇記念会なのか？自らに問うてみる。敗戦後自分の確立に苦んだか右往左往しながら、学びつつ、精神的に河上、末川、蜷川の三先生の影響を受けた。勿論、外にも福沢諭吉も同じように敬愛している。福沢、河上先生には当然一面識もないが京都に学んだので末川、蜷川両先生には個人的面識はないがいろ〳〵と学び感動を受けた。

社会人になってから労働運動、市民運動、自治会等にたずさわってきたが、いつも敬愛する四先生を指標としている。

これが自らへの答えである。

（京都市伏見区　山崎　利一）

科学は進歩しているのに思想は向上せず、大国主義、覇権主義のソ連共産党の崩壊は当然の帰結、資本主義の何たるかを総括出来ずに待望するとは笑止。

昨年は持病の膝疾患悪化の為参加できませんでした。今年も残念ながら出席出来ません。気持ばかりのものですが送ります。会費は後日送ります。

「文化評論」十月号、一海知先生の塩田庄兵衛著「河上肇」の書評を読みました。

（長野県立科町　両角　康則）

いつも総会に新鮮な「信州リンゴ」をお贈りいただき有難うございます。

（事務局）

心静まる浄域、洛北法然院は、毎年出かけたいとの意欲をそそる憧憬の地である。ことしもぜヒと思っていたが、亡母のの七年忌のため、不参となった。

世界史激変の一大ドラマを日々見る思いの今日このごろだが、河上肇先生もし健在ならば、いかなる所見を発表されるかと興味が湧く。しかし、世上の動向いかに変転しょうとも、先生の眞理を求めてやまない誠実、謙遜の努力は新しく発揮されて世を教導するに違いないと思う。

眞理探求の求道心、一貫変ることなきシンセリティ、これはいつの世にも伝えらるべき人類の至宝である。

（奈良県三郷町　山崎　宗太郎）

一寸気になりました表現左の如し。

会報三八号21ページ上段。『やはり人間というものは科学だけを頼りにしていては過ちを犯すものであり、・・・・科学では分からないこともあるので原点に返ろうという動きが出て来ておる訳でございます』

拙者など人の思想も行動も科学的方法で対処することがやはり必要であり正しいことであると考えていますため、増々この方向で科学的方法の内容を充実させてゆくべきであると思っておりますので、会報のこの表現が気になりました。おそらく拙者の考えと矛盾するものとは思われませんので、よけいに表現の仕方が気になりました。

（宇治市　香川　泰伸）

会報三八号たのしく読みました。ありがとうございます。池上先生は開会の挨拶の中で人権とヒューマニズムの大切さを強調され、私もその通りと思います。「今ま

ではどちらかと云うと人権とヒューマニズムというものは科学の陰にかくれて表に出ないという要素がございました。以下略」とおっしゃっています。私も同感ですが、私は史的唯物論、唯物弁証法の科学性をよりどころとして生きたいと思っています。

東欧の社会主義の崩壊を機に改めてマルクス、エンゲルス、レーニンの著作を読みました。そして社会主義の発生も崩壊も史的唯物論の一過程とみています。後退があっても不思議ではありません。

愚息が大学在学中（経済学部、立命館）息子の読書指導でマル経の本を読んで十数年です。老人の片意地で必死に唯物論の科学性にしがみついているわけではありません。

東北の片田舎にいて、こんなことを考えている七十歳の老女です。あと何年生きるのかわかりませんが、老眼をしばたきながら世の動きを見続けたいと思います。その後は誰かが見続けてくれることでしょう。

（秋田県横手市　和泉　とく）

冠省　今年も都合悪く出席できないのが残念です。ソビエト連邦の現状を見て社会主義の破綻とする見方が一般に支配的になっているようですが、本当の社会主義社会が人類の理想であることを、私は疑う気になれません。ただ、その理想の実現が相当遠い将来になったことも否定できないようです。その意味で近い未来における社会主義の勝利を確信して、なくなった河上先生がいささか羨ましい気もいたします。

ではご盛会をお祈りします。

敬具

（武蔵野市　旭　季彦）

拝復　いつも河上会のお世話をして頂き深謝いたします。

人類の理想である社会主義の国が、世界史上初めて創立されたソ連邦が、今年八月に七十四年で崩壊したことは何としてもショックでした。若しも河上先生がこの時期、生存されておられたら何う思うでしょうか。私も、あまりにもソ連邦やソ連共産党に関する情報の不足から極めて認識が不足していたことを残念に思いました。それにつけてもソ連邦の指導部の無原則的な政治指導にはあきれます。河上先生のように理論をしっかり研究し、信念を貫き通すことの大切さを痛感しております。

今年もまた勤務上、総会に出席できません。

（豊中市　後藤　嘉七）

ソ連で共産党の崩壊という予想だにしない時代になって、本当の意味での社会主義思想―共産主義思想の真髄が問われる時代になったと思います。河上肇先生の貧乏物語、自叙伝等・・・・いまの世をどの様に見られるか？

この会に集って居られる諸先達の御卓見も御聞きしたいとは思いますが、日常瑣事に忙殺されて記念会に参加出来ないことを残念に思っています。皆様の御健康を祈ります。

（広島市安佐南区　丸屋　博）

まず記念会事務局一同様のたゆまぬ御心配に感謝いたします。ソ連、東欧の変貌、日本でのバブル、原因に共通しているものがあるのではないかと思い、縁が変色した貧乏物語を精読しています。種々の事情で一堂に会わせなくても会報を絆に励ましあっていきたいと思います。

敬具

（神戸市垂水区　内野　治幸）

会報三八号を有難く拝受致しました。内容については申し上げるまでもなく、何れも感銘の章でありました。河上先生を敬慕してやまない私にとって会報は〝生命の泉〟〝生涯の伴侶〟であります。何卒発行をいつまでも続けて下さい。

先は右寸堵ながら御礼迄申し上げます。

（西宮市　石井　公代）

いつもお世話になりまして有難く御礼申し上げます。御申越の平成三年度会費三千円也は本日振込みました。

私は本年二月四日に八十歳を迎え、去る敬老の日には尼崎市長より記念の杖を贈られました。

河上先生の名句

「たどりつき　ふりかえり見れば　山川を越えては越えて来つるものかな」

を深く味わっております。今後とも何卒よろしく御高配下さいますようお願い申し上げます。

啓白

（尼崎市　古瀬　重治）

会報ありがとうございます。毎号興味深く読んで居りますが、今号にも杉原先生の御健筆拝読まことに嬉しく存じます。一層の御健祥をお祈りします。

総会にも一度出席してみたいと念願していますが、日曜日はどうしても神戸を離れ難く今年も残念です。

（神戸市須磨区　涌井　安太郎）

年度総会には先約あるため残念ですが欠席致します。毎号の会報の編集に御苦労様です。昨今のソ連、東欧が激動するニュースの中で河上先生にまつわる記事や研究、お話しの記事は大変私には勉強になります。

会報を楽しみに待っています。よろしく。

（岸和田市　野口　政廣）

拝復　一九八九年に京都大学を定年退職し、現在は名古屋外国語大学に在職しております。御盛会をお祈りいたします。

（神戸市長田区　平井　俊彦）

先生の活躍、七十年前になりました。懐古、誠に懐しい次第です。

（豊中市　四角　誠一）

謹啓　秋も深まりゆく候と相成りました。河上肇博士記念総会にご案内たまわり有難うございます。事務局の先生方には諸準備で何かとご多忙のことと拝察致します。一九九一年度総会も、都合で参加できないのを残念に思っております。

総会が盛会であります様お祈り申し上げます。杉原四郎先生、細迫朝夫先生、塩田兵衛先生方にもご無沙汰致しております。よろしくお伝え下さいませ。

一九八七年十一月二一日、京都市内の哲学の道を散策、法然院におもむき河上博士ご夫妻のお墓に詣でましたことを思いを馳せております。〝河上肇博士萬歳　マルクス主義萬歳〟〟世界にどのような政変がおこりましょうとも、今日もカール、マルクスの『資本論』を読みます。マルクシズムは、必ず最後の勝利を得るでしょう。

（長崎市　川原　竹一）

いつもお世話になりありがとうございます。今年は十月二十日に他の所用があり、出席できなくてすみません。河上先生のお墓には年内にいつかお参りしたいと考えて

います。　最近、岩波文庫の『貧乏物語』、『河上肇評論集』（杉原先生編）を読みました。若い頃読んだまま、ホコリをかぶっている『経済学大綱』や『資本論入門』をまた読んでみようと思っています。

（奈良県三郷町　上野　晃）

一度是非総会へ出席致し度く想って居りますが、本年もどうやら出席致し兼ねます。色々の民主運動をやって居るので、今知事選が酣（たけなわ）ですし、どうやら出席出来かねます。想えば旧制中学生時代から軍国主義教育を受けた時代でしたが、ロマンチストとして高山樗牛の格調高い名文にあこがれ断然うつつをぬかした時代を通り、大学へ進んでも思想が変らなかったが、地方公務員に就職して好きな政治学の勉強に力を注いでいる中、河上先生の「第二貧乏物語」を読んで一大転換を来たし唯物史観の学徒となり、今日まで変らぬ勉学に励んで居ります。

常に社会発展の法則を確信して前進するのみ、これが活力と若さの秘訣です。

（和歌山県広川町　柳渕　泰助）

冠省　せっかく御案内を賜わり乍ら、当日は日本法政学会の理事会（チサン・ホテル）と重なり、今回は欠席しがたい事情のため、法然院にお詣りできぬこと、大へん残念です。すでに、殆んどが高齢者となり、次の機会に全員が参加できますよう願ってやみません。皆さん方の御健勝を切にお祈り申します。

（箕面市　黒田　了一）

会報№38、有難うございました。次号での「河上没後四五周年の集い」での一海、置塩両先生のご講演内容たのしみにしています。総会の林先生のご講演も紹介方宜しくお願いします。

総会には欠席しますが、盛会祈ります。

（徳島市　中谷　武雄）

前略　一度恒例の総会に出席させて頂きたいと思いつつ、今年も又、欠礼させて頂きます。（同じ日に田舎にゆく用件がすでにつくってありまして）

医学生時代は、法然院のすぐ近くに下宿しておりましたので、そのうちに是非と考えています。安井病院の故安井信雄先生が河上先生の主治医であられたことから、私の若い時代、先生の奥様（リュウマチでしたが）への

往診を度々させて頂いていました。

（京都市西京区　橋本　雅弘）

前略　総会御案内拝見いたしました。当方、家内が二年二ケ月にわたる闘病生活の末、九月六日六十五歳の短い生涯を閉じました。生前一度は妻と共に法然院詣りを夢見ていましたが、念願果せず残念でなりません。ここしばらく残務整理やその他に併せ喪中でもあり遠出をさし控えていただきますれば何卒今後共よろしくお願い申し上げます

（新潟県豊栄市　有田　惣三郎）

前略　会報を読ましていただくだけの会員ですが、諸先生の文章にいろいろ教えられています。老年層の中ではまだ若手なのでしょうが、体に故障多く、旅行、会合への出席等思うにまかせません。お許し下さい。

（東京都世田谷区　上杉　捨彦）

いつもご連絡いただきありがとうございます。今年も総会に出席できなくて残念です。

十月二十日は私どもの会の全国事務局局長会議が二十二日から妙高高原でありまして、その準備のため欠席をご了承下さい。

来年は役も辞めますので、出席可能と思います。健康であってのことですが。

皆さまによろしく。

（神奈川県泰野市　露木　公一）

老生本年八十二才を過ぎ、最近さみに足腰のおとろえを感じ遠出をさしひかえています。世の中がいかようにかわろうと、河上先生の生涯は後進のもって範とするところです。

総会が盛会であることを祈っております。

（東京都練馬区　金子　楽）

いつも連絡をいただきながら欠席ばかりで申し訳けなく存じています。どうも健康上のため欠席ばかりしています。元気で墓前祭に参加させていただいたことがずい分以前のように思えるようになりました。落胆する洛南の友（会員）の姿がみえるようです。

〝一寸先は闇だ〟という教訓が本年も生かせず残念です。

（三原市　福島　史郎）

〝河上先生が今日生きておられたら何と発言されるでしょうか？〟
こんなことを思いながら多忙な毎日を送っています。私自身の再出発の原点のような場所が法然院の墓前で、丁度秋（十二年前のひつじ年）の総会の頃でした。
ご参会の方々のご多幸を祈っております。

（福岡市南区　阿波　保喬）

主人はただいま海外出張中で帰国は年末になると存じます。
河上肇先生記念会がますます御発展されますとともに総会のご盛会をおいのりします。

（横浜市中区　佐藤　敬治）

昨年も所用あって、前約を取り消すことが出来ず欠席しましたが、今年もまた出席する事が出来ず残念です。遠く河上会の盛会を祈ります。

（長野県伊那市　北原　邁）

平素はなにかとお手数をかけています。
毎年申し訳なく思い乍ら欠席ばかり、落葉のふりそそぐ法然院を偲んでいます。

（山口県小野田市　谷口　年男）

親戚の祝い事と重なり欠席いたしますが、世話人、事務局の方々の御努力により今年も総会が盛大に行われることを感謝しつつ、何も出来ない自分を恥ずかしく思います。

（京都市上京区　稲田　素臣）

御免下さい。長雨で、全く困ったお天気でございます。「記念会」をご案内下されまして有難うございます。今回もまた欠席ですみません。老人になりますと、遠出は中々苦痛になります。御寛恕下さい。
ご盛会をお祈りいたします。

（市川市　芳賀　守）

不一

九一年総会の御盛会と本会の益々の発展を祈りあげます。
当方眼底出血のため全く見えなくなり、遠隔地の旅行は控えています。欠席御了承下さい。

（浦和市　木村　太郎）

会報をお送り戴き有難う御座居ます。

総会の件ですが、私の体調は相変らずおもわしくなく、まことに申訳御座居ませんが欠席させていただきます。

御盛会をお祈り申し上げます。　かしこ

（清水市　宮城島　美智代）

病気療養中のため欠席させていただきます。会の発展を祈って失礼します。

（岸和田市　田辺　平）

冠省　当日は、朝鮮史研究会の大会出席のため上京中です。

ご盛会を祈ります。　匆々

（京都府木津町　中塚　明）

御盛会を期待致します。

（東京都文京区　小倉　武一）

総会の御案内、有難うございます。是非伺いたいのですが、特に林先生のお話残念です。他の会合と重なり出席出来ません。皆様によろしく。

（京都市左京区　大橋　満子）

河上先生のご遺志を実現することが、ますますわたくしたちに課せられることと思う昨今です。

ご参会の皆様によろしく。

（京都市南区　木原　正雄）

お詫びと訂正

◎会報39号に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

ページ	行	誤	正
3	上3	想該	愬該
	上7	大に	大いに
	下19	困る	因る
5	上21	全身	全集
6	上2	イコール、「田村生」	イコール「田村生」
	下16	支群	支那
	下16	革命党関」	革命党関係」
9	上20	全は	余は
	下13	そのこの体	その文体
10	下13	さんんの名	さんの名
11	上5	米浜氏に	米浜氏の
18	上16	なか―	なかく（なかなかの意）
20	上5	『三田学会雑誌』	『三田学会雑誌』」
22	上9	世話人	「世話人
	下7	秀男	李男
24	上10	「いず泉」	「泉仙」
25	下13	舞葉会	無葉会
27	下6	林	一海
28	上11	五〇六	九〇六

◎会報38号につきましても、中瀬博次様より御指摘がありましたので、次の通り訂正いたします。

ページ	行	誤	正
11	下1	近代	近大
13	上15	活淡	恬淡
14	上20	私にも	私も
14	上20	切株を	切株に

編集後記

○　河上博士ともっとも御縁の深かった壽岳文章先生が、一月十六日に死去されました。前世話人代表の杉原四郎先生に追悼文を書いていただきました。

また、章子先生に巻頭の御写真をお願いしたところ、快諾され御写真と共に「仙人掌帖」（復刻版）を貸して下さいました。「仙人掌帖」は壽岳家来訪者記念会署名簿（大正末より昭和三十三年まで）で、「博士をめぐる、内外の知友二十三名の人々（邦人、外国人ほぼ半々）。記された様々な筆跡は、広大にして多彩な博士の交遊の前半生をいろどり、開巻一番墨痕鮮やかな巻紙の書信に始まり、詩、漢詩、和歌、箴言、アフォリズム、目録…に及ぶ一流の個性集う愉しげな一大饗宴と申せましょう。それは單に、一学匠、一家族の記録にとどまるものではなく、それ自体で一つの「昭和史」を形づくる貴重な資料となっています。」（出版元の芸艸堂の説明文より）

この掌帖に記された人は、本書の名付け親である新村出博士をはじめ河上肇、石田憲次、市川三喜、柳宗悦、津田青楓…、エドマンド・ブランデン、バーナード・リーチ、ジョン・ピルチャー…等、文章先生の良識ゆたかな、はばひろい交わりを見ることが出来ます。

○　京大河上祭等の演壇を飾った「河上肇肖像画」を描れた松尾画伯がその作品集を出版され、その記念会が山口県周東町において二月十六日に開かれた。奇しくも周東町は河上博士の生地・岩国のすぐ近くである。

私は、中国人留学生郝志剛君（大阪教育大）と一緒に、この出版記念会に参加した。会場の周東町中央公民館には約八十人の松尾画伯の画業をたたえる人が参集した。

会場には、京都府立総合資料館に保管されている「肖像画」を、京都民報社々長の松村さんが撮影された縮小寫真版が飾られて、人々の感銘を深くしていた。

なお、この五月には画伯の作品を展示した「松尾美術館」が開館される。

場所は、　山口県玖珂郡周東町久田

電話〇八二七－八四－一八九六

○　事務局担当者の多忙のため、また力不足により、前号で予告しました置塩先生の講演録、総目次、会員名簿をお届けすることが出来ません。深くお詫び申し上げますとともに、一日も早く完成するよう努力いたしますので、御寛容下さいますようお願い申し上げます。

（沖本　記）

入会のすすめ

河上肇記念会は、一九七三年に発足して満十九年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

〒571
大阪府門真市元町二―二四
沖本彰税理士事務所内
河上肇記念会
電話（〇六）九〇六―八〇三八
振替口座大阪 三一三一九五

河上肇記念会 会則

一、この会は河上肇記念会と称し、大阪（または京都）に事務所を置く。

二、この会は河上肇先生の人格とその業績を称え、これを広くかつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。

三、この会は河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人々を会員とし、資格や政治的立場を問わない。会員になろうとする者は文書で事務局へ申し込む。

四、毎年一回総会を京都で開き、会報発行・集会およびその他の事業を行う。

五、この会の運営発展のために世話人および必要に応じて顧問を置き、総会において選出する。
世話人代表は世話人会で選出され、この会を代表する。
世話人中の事務局担当が事務を執行する。
世話人の任期は二年とし、重任はさまたげない。

六、この会の経費は会費ならびに寄付金をもってあてる。
会費は年額三千円とする。

七、会則に定めなき事項については世話人会で決定する。

八、この会則の改廃は総会の決議による。